

2025 年度入学者選抜 II 期

心理学実践研究学位プログラム 臨床心理分野

解答例

■ I.

- a. 扁桃体 b. 対象恒常性（永続性） c. 認知的不協和 d. 逆転移
e. スーパービジョン f. 帰無 g. （学）校長 h. アフォーダンス
i. 投影法 j. ADHD（注意欠如・多動症/注意欠如・多動性障害） k. セルフコントロール
l. 認知行動療法 m. サーカディアン（または概日） n. エンゲイジメント（エンゲージメントも可） o. 確証バイアス p. 面会交流 q. ネグレクト（保護の怠慢）
r. 少年鑑別所 s. 児童中心療法 t. 汎適応症候群

■ II.

1. 回答のポイント

発達障害の鑑別を行うために、成育歴、自他の評価、および認知機能（神経心理学的）評価
→抑うつや不安の影響も考慮する

2. 回答のポイント

①早急に決めつけた見立て（＝不十分な情報にもかかわらず、問題発生の要因を限定し、アセスメント不十分なままに心理面接を第一支援方法として早急に提案）

対応の留意点：②生物心理社会モデルに留意した見立てと対応。（特に心身の医療ケアが有益か否かの判断）

⇒③とりわけ年齢/発達を考慮した更年期障害に関する事実確認（生物）。④またその可能性に対する本人や家族を含む周囲の認識や態度の確認（心理/社会）。⑤（語りでは結果としての抑うつ感ではあるが）抑うつ感、イライラや不眠の発生の時系列の確認（生物/心理）。⑥最近になっての仕事量/経済を含めた環境/生活変化の有無などの事実確認（社会）。⑦心理面接が第一支援になるか、医療や環境調整の活用が第一支援となり、心理支援はガイダンスを含む補助的支援となるかの判断および本人との話し合い。⑧その他の相応しい内容

3. 回答のポイント

問題点は①得られた結果が有意であることと、関係性が高いことは別であり、相関係数の値から関係性の高さを判断しなければならない、②正の相関か負の相関かが言及されていないので、示された情報だけでは結論は導けない、が挙げられる。改善策として、①相関係数の値も示して言及する、②正負の方向性も確認する、ことが必要

4. 回答のポイント

①心理テストを実施する前に、どのような相談目的かを確認し、心理テストに期待していることやテストを行うことが必要かどうか確認する。また、本人にも実施の目的を説明し、同意を得る。学生が安心感を得られるような関係を作る。

②学業成績の低下、集中力の低下の状況について具体的に聞き取る。その上で、

1.知能検査・・・WAIS-IVなどで全般的な知的機能を評価する。2.性格検査・・・ビッグ・ファイブ性格検査（NEO-PI-R）や東大式エゴグラムなどで自己理解の不安に対し、性格について言語化し、明確にできるように支援する。3.不安やうつの検査・・・CES-D、STAIなどを実施してうつ状態、特性・状態不安について評価し、本人の精神症状を評価する。4.その他、生活習慣の状況を確認する。

③自己理解の支援が目的であるため、テスト結果は本人にとって自己探究のヒントとして役立つように配慮する。フィードバックの際には、評価結果が自己評価を下げたり、固定的に受け止められたりしないように配慮し、支援的でポジティブな自己理解を促すように心がける。生活習慣の悪化なども考えられるため、学生生活の状況についても具体的に聞き取る。

■ III.

心理学研究における分析の結果を正確に読み解き、数値的根拠に基づいて仮説の成否を論理的に説明する能力を評価する意図で出題している。

著作物の著作権許諾処理の問題により解答または解答例を公表することはできない。